

神のおとずれ

日本聖公会 神戸教区報



2017年 6月号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
<http://www.nskk.org/kobe/>

発行責任者
司祭 芳我 秀一

印刷所
文明堂印刷所

「人の悪口を言いなさんな」

バジル 八代 智



まず始めにこの場をお借りして、昨年末帰天した母マリヤ・トシ子が、生前大変お世話になりました教区・教会の皆様、そして最期まで誠心誠意母を看守ってくださいました光朔会オリンピアの皆様にご心より感謝申し上げます。

早いもので母が他界して、半年が経とうとしています。牧師の父と結婚したが為に貧しい生活を余儀なくされ、結婚式の際の着物二着を質に流したり、米櫃の底が見えた時

はいつも辛かったといった話を聞いたこともあります。食費や養育費を工面するのも大変だったようですが、それでも家計がピンチになれば、いつも赴任先の教会の信者さんがまるでタイミングを見計らうかのように、お米や野菜等の差し入れをしてくださり、「いつも心配してくれてたんやろね。どこの教会も本当に信者さんに助けてもらってたわ」と、晩年記憶が怪しくなるまで感謝の気持ちを口にしていました。にもかかわらずこれは父の道楽と言うべきか、はたまた祖父の影響でしょうか、いつも牧師館には神学生や青年信徒がたむろしていて、若者たちとワイワイ飲んだり食べたりしておりました。もちろん大勢の食事は母の手料理でし

たが、嫌な顔ひとつせず、いつも笑顔で食事を供していた姿を子供心によく覚えています。今の牧師の家庭も決して裕福ではありませんが、わたしが幼少の頃の地方教会はこの牧師さんのご家庭も非常に貧しく、毎月のやりくりが本当に大変だったことと思います。にもかかわらず、わたしたち姉弟は、そんな母の苦勞をあまり感じることもなく、スクスク育てられたと言えてでしょう。これは「武士は食わねど高楊枝」ではありませんが、「金に卑しい牧師になるな」が口癖であった父の思いに共感した母が、幼児教育にも長年携わっておりまして、「家は貧しくとも心は豊かに」という教育を、わたしたち子供に伝えてくれたのかも知れませんが、唯一わたしが誰かの悪口や陰口を言ったりした時は、「人の悪口を言いなさんな」と常に嗜められておりました。

聞けば、母もわたしにとっでは祖母にあたる母親から、「人の悪口を言いなさんな」と育てられたそうです。

父方の祖父である八代斌助はあまりにも有名で、現在わたしも祖父が設立した学校で勤務しておりますが、その祖父以上にわたしが強く影響を受けたのが、母方の祖母、静でした。祖母はその名の通り実に温厚な性格で、祖母の怒った顔を死ぬまで見たことがありません。わたしだけでなく婦人会などの会合で、祖母と親交のあった信者さん方が口を揃えておっしゃってくださいるのは、「静さんは本当に優しくして下さるのよ、穏やかな方でしたわ」というものでした。事実、祖母も人と優しく接することはあっても、人の悪口や陰口は聞くのも大嫌いだっただけです。

こうした躰は「勿体無い精神」と同様、かつてこの国では当たり前のようにどのご家庭でも子供たちにしていたように思います。一つの頃からかこうした躰という人格教育、人格陶冶をあまり家庭でしなくなつたように感じるのには、はたしてわたしのせいでしょうか。

主イエスも山上の説教の中で次のように述べています。「柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ」

(マタイ五・五)

また二十四節では兄弟と仲直りをしてから祭壇に供え物を献げなさいと、礼拝に臨むわたしたち信者の心の在りようを求めておられます。わたしたちにはそれぞれ一つの口が、神様から与えられています。人の心を励ましたり慰めたりするその同じ口で、容易に人の心を傷つけたり悲しませたりもするのです。

それだけにイエスをキリストと信ずるわたしたちは、主から「口から出て来るものは、心から出て来るので、これこそ人を汚す」(一五・一八)と言われないうちにも、優しいことばを人々に日々語りつづけるよう心掛けたいものです。毎日の何気ない優しいことばの積み重ね、これこそがキリスト教宣教の本質であると信じて疑いません。

最後に昨年聖人とされたマザーテレサの優しいことばを紹介いたします。「あなたに出会った人が皆、最高の気分になれるように、親切と慈しみを込めて人に接しなさい。あなたの愛が表情や眼差し、微笑み、ことばに現れるようにするのです」。

(八代学院院長・神戸国際大学附属高等学校チャプレン)